「責任を背負って」

マタイによる福音書 27:11-26
イザヤ書 53:4−5

2024 年3月 17 日
野村 友美 師

＜責任というもの＞

「責任」という言葉は、なかなか重たいイメージですよね。それは多分、「責任」が私たちに背負わせる義務だったり、嫌でもしなきゃいけない仕事を連想させるからだと思います。

自分の立場に応じて、あるいは自分がしたことの結果を引き受けて、やるべきことをやる。

それを私たちは「責任」と呼びます。

日本語の「責任」という文字は、まさに「なすべき務めを任される」という意味ですが、英語とかドイツ語で「責任」に当たる言葉の元々の意味は「応答すること」、つまり呼びかけに答えることなんだそうです。

「呼びかけに答える」ということは、誰かしら呼びかけてくる相手がいる、ということになりますよね。その相手は家族だったり、同じ集団に属する仲間だったり、同じ地域や国に生きている人たちだったり、時と場合によっていろいろだと思います。

誰にしても、関わりを持って同じ場所で一緒に生きている、そういう相手に対して、私たちはお互いに責任を持つものです。

自分だけの問題とか、他の誰とも関わらない世界には責任なんてそもそも存在しないでしょう。

他の誰かと関わり合って、呼びかけたり呼びかけられたりして、一緒に生きる。

この関係を大事にするために、「責任」というものはあるんです。

置かれている場所、置かれている立場や状況で、どうするのがお互いにとっていちばん正しいか。

どうしたらお互いにとって、いちばんいい結果に繋がるのか。そのために呼びかけられていること、自分に任せられていることを知って、

それを選び取って行動する。責任を取る、というのはそういうことだと言えるでしょう。

だからいつどんな時でも、誰もが自分の責任をちゃんと果たせたらそれは何よりですが、現実はなかなかそうはいきません。

自分が引き受けるべき責任が何か、それはわかってるけどやりたくないことはやりたくない。

できれば責任なんか取らないで済ませたいし、誰かに押し付けられるんだったら、ぜひそうしたい。

これは私たちにとって「ダメージを受けたくない、とにかく自分を守りたい」という本能的な欲求です。この欲求の方を選び取って、自分の責任を放り出してしまったのが　今日の聖書の物語に登場するローマ総督ピラトでした。

＜ピラトの責任、イスラエルの責任＞

イエス様を捕まえたイスラエルの指導者たちは、一方的で理不尽な裁判の後、イエス様をピラトのところに連れて来ました。イエス様を犯罪者として、みんなの目の前で処刑するためです。

当時のイスラエルはローマ帝国の支配下にありましたから、自分たちで勝手に死刑を執行することができませんでした。
まずローマから派遣されている総督のピラトに訴えて、死刑の判決が下ったら、ローマのやり方で処刑されることになっていたんです。
こっそり殺してしまうこともできたでしょうけど、指導者たちはイエス様の影響力を怖がっていました。
イスラエルの多くの人たちが、イエス様のことをメシア、神様から遣わされた新しい王様だと信じていたからです。そのままでイエス様が死んでしまったら、大騒ぎになる恐れがありました。暴動が起きて、ローマの軍隊が押さえ込みに出てきて、今度こそイスラエルは滅ぼされてしまうかもしれません。
残されたイエス様の弟子たちが、「イエス様はあの指導者たちに殺されたんだ！」と人々を煽って、復讐しようとするかもしれない。
そういう怖さもありました。
だから彼らは、「イエスはメシアじゃない」とみんなに納得させてから殺すために、どうしてもイエス様を犯罪者として処刑したかったんです。
でも実際のところ、イエス様には死刑になる理由が何もありませんでした。
他の福音書は、イスラエルの指導者たちがイエス様のことを「ユダヤ人の新しい王を名乗って、ローマに対して反乱を起こそうとした」
という理由でピラトに訴えた、と伝えています。
もちろんそれは、指導者たちが勝手に考えてつけた理由です。イエス様が連れて来られた時、ピラトにもそれが嘘なのはわかりました。
ピラトはこの裁判の最高責任者でしたから、正しい判決を言い渡すことが彼に任せられていた「責任」でした。
イスラエルの指導者たちがどんなに騒いだって、「この人は無罪！はい、おしまい！」と言い渡して、ピラトの責任で終わらせることもできたんです。でもピラトはとにかく「面倒な揉め事を起こさせたくない」と思ったようです。
イエス様がピラトの判断に任せたまま、ご自分で何も弁解しないのをいいことに、ピラトは不思議がりながらもそのまま成り行きに任せました。
そして、お祭りの時に人々が希望する囚人を一人釈放する習慣、いわゆる恩赦を利用して、ピラトは自分の責任じゃなくてユダヤ人たちの責任で、イエス様を無罪放免にしようとしたんです。
もう一人いた囚人はイエス様と違って、明らかに罪を犯した人物でした。バラバ・イエスというその囚人は、前に暴動が起きた時に人を殺したり略奪をした罪で、死刑になる予定だったようです。おそらくユダヤ人たちがローマに対して起こした暴動の中で、バラバはローマ人を殺すか、ローマ人の財産を奪うか したのでしょう。
つまり、ローマ側から見れば凶悪な犯罪者ですが、イスラエルの人たちにとっては、バラバはある意味では英雄でした。
イエス様を死刑にしたかったイスラエルの指導者たちは、そこを利用したんです。

あのイエスはメシアを名乗ってたくせに、みんなの期待を無視して全然ローマと戦わなかったじゃないか。それに比べてバラバ・イエスはどうだ、勇気あるイスラエルの英雄だぞ。
ほら、みんなはどっちのイエスを助けるべきだと思う？そんな風に、集まっていた人たちを説得したんでしょうね。
　イエス様の教えに心を動かされて、イエス様がなさった癒しや奇跡を喜んで、弱い立場の人たちに寄り添うイエス様の姿に感動して、
「この方こそ救い主だ」と信じたはずの人たちです。それでも、人々は自分たちの理想のメシアのイメージを手放せませんでした。
ローマ帝国を倒して、イスラエルを解放して、圧倒的な強さですべての人を神様に従わせる、新しい王様。そういうメシアを人々は期待していたんです。
神様に選ばれた民族として、神様の呼びかけに応えて従う。それこそが、イスラエルの人たちに任されていた本当の「責任」でした。
でもこの時、彼らは本当に任せられていることじゃなくて、自分たち好みの「責任」を選び取ったんです。
期待はずれのイエスは十字架につけろ！
その責任は自分たちが取るから、と人々は的外れの「責任」を引き受けました。そしてピラトの方も、わざわざ手を洗ってみせるパフォーマンスまでして、自分の責任を投げ捨てて、目の前の人たちに押し付けました。

＜イエス様が共に背負ってくださる＞

　果たすべき責任を誰も果たさないで、自分たちの欲求とか自分好みの正しさとか思い込みに振り回されてしまっている。そんな状況が、イエス様の十字架での死を決めました。
誰も選び取れなかったその責任を、イエス様が身代わりに引き受けられた。それが、イエス様の十字架での死なんです。
イエス様が十字架で背負われたのは、ピラトとイスラエルの人たちの「責任」だけじゃありません。私たち、すべての人の「責任」を背負って、イエス様は十字架にかけられました。
神様がお造りになって愛しておられる、この世界のすべてを、自分自身と他の人たちみんなを、神様の思いに応えて精いっぱい大切にすること。
神様と、そして他のみんなと一緒に生きていくために、それぞれに与えられた務めを誠実に果たすこと。
それが私たち一人一人、すべての人に任せられた「責任」です。
なのに、この責任を放り出して誰かに押し付けたり、自分好みの的外れな責任を引き受けたがってしまう。ピラトやイスラエルの人たちの罪を、私たちは誰も他人事みたいに責めたりなんかできません。
私の、私たちの、すべての人の罪を身代わりに背負ってイエス様は十字架で死なれたんです。
旧約聖書の預言者イザヤが伝えた、この言葉のとおりに。

「彼が担ったのはわたしたちの病
彼が負ったのはわたしたちの痛み
であったのに
わたしたちは思っていた
神の手にかかり、打たれたから
彼は苦しんでいるのだ、と。
彼が刺し貫かれたのは　わたしたちの背きの
ためであり
彼が打ち砕かれたのは
わたしたちの咎のためであった。
彼の受けた懲らしめによって
わたしたちに平和が与えられ
彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」（イザヤ53:4−5）

どうしようもなく無責任な私たちの罪を背負って、イエス様は私たちが赦されるために死なれました。そして復活されたイエス様は、新しい呼びかけを私たちすべての人に差し出しておられます。
神様の愛と平和を生きる、新しい命を受け取りなさい。神の国の民として新しい人生を一緒に生きよう、とイエス様は今日も私たち一人一人に呼びかけておられます。
このイエス様の呼びかけに応えるなら、私たちの「責任」はもう、背負いきれない重たい荷物じゃありません。
イエス様が一緒に背負って、一緒に歩いてくださるからです。

先週の日曜日、私は前任の教会である福岡教会に行ってきました。私の後任として遣わされた牧師が天に召されて、福岡教会はこれから　しばらくの間、牧師がいない状況が続くことになっています。同じ地区の、そして他の地区の教会と牧師たちも、できる範囲で福岡教会を助けてくれるでしょう。お互いに関わり合って、一緒に生きる関係を大事にする「責任」を背負って、私もできる限りの協力をしたいと願っています。
もちろん、神様が遣わしてくださったこの呉教会での務めが、私にとってまず第一に背負うべき「責任」です。だからこそ、一緒に「責任」を背負ってくださるイエス様が、必要な知恵と力を与えて助けてくださる、と信じて期待します。
同じように、皆さんがそれぞれに背負っておられる「責任」も、イエス様が一緒に背負っていてくださると信じて、助けを祈ります。神の国の民として、神様の愛と平和を生きる一人一人として。神様から任せられている「責任」を、イエス様と一緒に背負って、私たちはこれからも一緒に歩んでまいりましょう。
お祈りいたします。